萩・津和野殺人ライン

長編推理小説

深谷忠記

光文社文庫

光文社文庫

長編推理小説
萩・津和野殺人ライン
著者　深谷忠記

2004年5月20日　初版1刷発行

発行者　篠原睦子
印刷　萩原印刷
製本　ナショナル製本

発行所　株式会社 光文社
〒112-8011　東京都文京区音羽1-16-6
電話（03）5395-8149　編集部
8114　販売部
8125　業務部
振替　00160-3-115347

© Tadaki Fukaya 2004
落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。
ISBN4-334-73676-9　Printed in Japan

㊐本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（03-3401-2382）にご連絡ください。

光文社文庫

長編推理小説

萩・津和野殺人ライン

深谷忠記

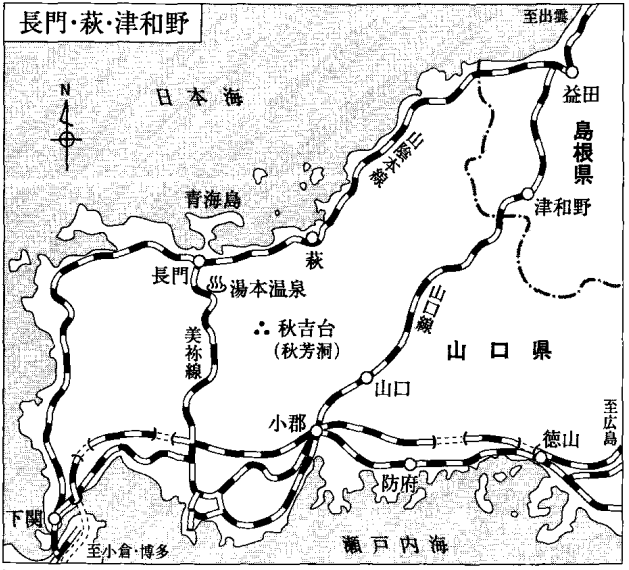
KOBUNSHA

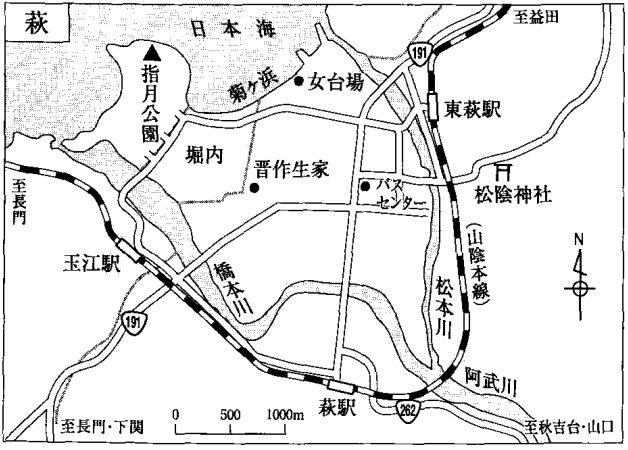
光　文　社

目次

プロローグ　5
第一章　あなたの故郷（ふるさと）　14
第二章　萩城跡の殺人　43
第三章　松陰（しょういん）と晋作（しんさく）　98
第四章　「イシバシ」はどこに？　178
第五章　影の追跡　231
第六章　長門・青海（おおみ）大橋へ　289
第七章　石垣と土塀の町の真実　333
エピローグ　370
解説　小梛治宣（おなぎはるのぶ）　380

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor


長門・萩・津和野
至出雲
益田
島根県
津和野
日本海
N
青海島
萩
長門
湯本温泉
秋吉台
(秋芳洞)
美祢線
山口線
山口県
山口
小郡
徳山
至広島
防府
下関
至小倉・博多
瀬戸内海


萩
日本海
至益田
191
指月公園
菊ヶ浜
女台場
東萩駅
堀内
晋作生家
バスセンター
松陰神社
至長門
玉江駅
橋本川
(山陰本線)
松本川
N
191
阿武川
萩駅
262
至長門・下関
0
500
1000m
至秋吉台・山口

プロローグ

「えっ、亜紀子姉さんに会った……！」

花崎恵利は、受話器を強く握りしめて声を高めた。

夫の稔はホテルの社長室にいたし、父の加津夫は出かけていて不在なのが分かっている。それなのに、恵利は思わず廊下の奥へ目を向けていた。

七年ぶりに聞く姉の消息に、彼女の胸は強い動悸を全身に伝え始めた。

恵利が、二人の子供を幼稚園へ迎えに行くために、ホテルの裏庭に建っている住まいへ戻ったのは、六、七分前――。

一度部屋へ上がって、外へ出ようとしたとき、居間の入口に置かれた電話が鳴り出し、恵利は受話器を取った。

相手は、東京の大学へ行っている再従妹の遠山千草だった。

「あら、千草ちゃん、珍しいわね」

恵利は意外に思いながら、言った。
夏休みや冬休みに帰省したとき、千草はたいてい一度は恵利たちの家――「萩望城（はぎぼうじょう）ホテル」――に顔を見せる。とはいえ、電話をかけてきたことなどほとんどなかったからだ。
「萩に帰っているんじゃないでしょう。東京から？」
「うん」
と、千草がどことなく硬い声で答えた。
「どうしたの、何かあったの？」
「そこにいるの、恵利お姉ちゃんだけ？」
千草が、恵利の問いには答えずに、逆に聞いた。
「そうだけど……なーに？」
千草の様子に、恵利もちょっと緊張し、話を促した。
すると、千草が、昨日渋谷駅前の路上で偶然亜紀子に会った、と言ったのである。
「亜紀子お姉ちゃんには、誰にも話さないでって言われたんだけど、やっぱり恵利お姉ちゃんにだけは知らせておいたほうがいいかなと思って」
電話の向こうで、千草が言葉を継いだ。
「ありがとう。それで、姉さん、どんな様子だった？」

恵利は、少し落ちつきを取り戻して、質問した。
「昔より少し痩せたみたいだったけど、元気だったわ」
「千草ちゃんと姉さん、どっちが先に気づいたの？」
「同時ぐらいかな。私が、向こうから歩いてくる人、亜紀子お姉ちゃんに似ているなって思って見ていたら、お姉ちゃんのほうも私の顔を見ながら近づいてきて、『もしかしたら遠山千草ちゃん？』って……」
「それから？」
「私が、『そうです、亜紀子お姉ちゃんですか？』って答えて、二、三分立ち話をしただけ。お姉ちゃん、なんだか急いでいる様子だったから」
「まだ石橋さんと一緒に暮らしているのかしら？」
「分からない」
石橋というのは、七年前、亜紀子が一緒に駆け落ちした相手である。
「じゃ、どこに住んでいるか、言った？」
「聞いても、教えてくれなかった。でも、私がアパートの電話番号を書いて渡すと、後で連絡するから、そのときまで自分に会ったことは誰にも話さないように、って」
「姉さんのほうから千草ちゃんに連絡する——そう言ったのね」
「うん」

「そう……」
恵利は小さく溜め息をついた。
「亜紀子お姉ちゃんに口止めされ、私、迷ったんだけど、連絡がくる前に、やっぱり恵利お姉ちゃんにだけは知らせておいたほうがいいかなと思って」
千草が前の言葉を繰り返した。
「感謝するわ」
「このこと、おじさんたちには……？」
「父にもうちの夫にも、当分黙っているつもりよ。だから、安心して。それより、姉さんから電話がかかってきたら、今度こそ住所を聞き出せないかしら」
「うーん……」
「何とか聞き出してもらいたいの」
「分かった。うまくゆくかどうか約束はできないけど、やるだけやってみる」
「ありがとう。それじゃ、お願いね」
恵利は、千草の「うん」という返事を聞いて、電話を切った。
具体的な暮らしぶりまでは分からなかったものの、七年間音沙汰のなかった姉が元気でいるらしいと知り、多少ほっとしていた。
一緒に暮らしているときは、恵利は、亜紀子があまり好きじゃなかった。父の加津夫に溺

愛されて育った亜紀子は、子供の頃から我儘で自分勝手で、妹の恵利がどう感じているか、どう思っているかということなど、全然理解しようとしなかったからだ。恵利は、何度大切なものを亜紀子に奪われたことか。それも亜紀子の場合、自分で放っておいたものを恵利が大事にし始めると欲しくなり、恵利から奪い取った。そして、自分のものにするとすぐに飽きて、また捨てるのである。七年前、加津夫の右腕としてホテルの営業を担当していた稔の場合もそうだった。恵利が稔を好きらしいと分かると、急に彼に接近を始め、自分の恋人にしてしまった。それでいて、しばらくすると、ホテルに滞在していた石橋宏幸という男に熱を上げ、駆け落ちしてしまったのだ。

このように、亜紀子はいつも我儘勝手だった。家を出て行ったのも、彼女の意思にほかならない。だから、加津夫は――たぶん口だけだとは思うが――あいつなどどこで野垂れ死にしようが構わん、放っておけ、という。しかし、そうはいっても、亜紀子は恵利にとってたった一人の姉である。どこでどういう生活をしているのだろう、とずっと気にかかっていた。それが、何とか元気に暮らしているらしいと分かり、安心したのである。

*

千草の電話から一週間経ち、十日経ち、一カ月経った。

この間、恵利は千草と四度電話の遣り取りをしたが、亜紀子からの連絡はないという話だ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

った。
文化の日が過ぎたと思ったら、あっという間に十一月ももう半ば近く。先月の末以来、千草が何も言ってこないので、恵利のほうから聞いてみようと思っていた矢先、電話がかかってきた。
といっても、それは期待していたようなものではなく、亜紀子からは依然として何の連絡もないという報告であった。
恵利は千草の話を聞き、がっかりして、
「そう」
と応(こた)えた。
四十日以上になるのに何も言ってこないということは、亜紀子は千草に連絡してくるつもりはないのだろう。としたら、どこかで元気に暮らしていると分かっただけでもよし、としなければならないのかもしれない。
恵利はそう思い、
「千草ちゃんには何度も電話してもらって、悪かったわね。もういいわ」
気を取りなおして、言った。
「ううん、私はべつにいいわ。それより、諦(あきら)めるの、まだ早いんじゃないかな」
千草が言った。

「でも、いくら待ったところで、姉さん、連絡なんかしてこないと思うの」
「そうかもしれないけど……」
「じゃ、私立探偵にでも頼んで捜すわけ？　東京近辺にいるらしいと分かっても、それだけじゃ捜しようがないでしょう」
「探偵には無理でも、捜し出せるかもしれない人がいるのよ」
「えっ？」
「恵利お姉ちゃんも、私の従兄（いとこ）の壮兄さん、知っているでしょう？」
「知ってるわ。数学者になったという、黒江さんのとこのご長男よね」
「そう」
壮は、千草の母親春江の兄の子である。だから、千草の父親逸郎の親類筋である恵利は、壮と血のつながりはない。が、分家の親戚に〝ちょっと変わり者がいる〟という話は小さい頃から聞いていたし、何度か顔を合わせたことはある。
「黒江さんのご長男なら、姉を捜し出せるかもしれないわけ？」
恵利は、千草の言わんとしていることがよく理解できずに聞いた。
「うん」
と、千草が答えた。
「どうして？」

「壮兄さん、名探偵なの。これまで、警視庁に協力して、難事件をいくつも解決しているの。だから」
「私も千草ちゃんのお父さんにお話は聞いているわ。でも、いくら名探偵でも、何の手掛かりも無いんではどうにもならないんじゃないかしら」
「そうかもしれないけど、相談するだけしてみてもいいでしょう」
「東京まで行って？」
「ううん、そうじゃない。壮兄さん、明日フィアンセと一緒に萩へ行くの。だから、話だけでもしてみたらどうかな、と思って。それで、今日はお姉ちゃんに電話したの」
「そう」
「どうかしら？　壮兄さんなら、誰にも話さないでって頼んでおけば、絶対に喋らない人だし」
「分かったわ。じゃ、考えてみる」
わざわざ電話してくれてありがとう、と言って、恵利は受話器を置いた。
廊下に立ったまま、壮の顔を思い浮かべた。といっても、壮が東京の大学へ進んでからは会ったことがないので、十年以上も前の顔である。恵利も壮も共に高校生だった頃、時々街で擦れ違ったりしたのだ。
無口な変わり者とはいえ、当時、壮は紅顔の美少年だった。一つ年上の恵利もちょっと胸

をときめかせた覚えがないではない。
あの壮が萩へ帰ってくる。
しかも、フィアンセを連れて。
恵利は、壮が昔とどう変わっているか、会ってみたい気がした。それに、彼の選んだ女性も見てみたかった。
が、そうは思っても、壮に姉・亜紀子の件を相談するつもりはなかった。千草が折角電話してきてくれたので、彼女には考えてみると答えたが、その点はすでに恵利の心は決まっていた。
何度か顔を合わせているとはいえ、言葉を交わしたこともない人間に、身内の恥とも言うべき事情を明かす気にはなれなかった。
それに、たとえ壮に相談したところで、どうにもならないだろう、と思った。

第一章　あなたの故郷（ふるさと）

1

いまにも崩れ落ちそうな石垣、誰かが通りがかりに触れたら上の瓦が落ちてきそうな土塀。東京だったら……いや、東京でなくたって同じだ。こんな石垣や土塀を放置したら、すぐに近所から危険だと文句が出て、コンクリートで固めなければならなくなるだろう。

しかし、この町には、それが堂々と残されているのだった。

美緒が足を止めて驚いていると、壮が、

「萩にだって、こんなところはそんなにありませんよ」

と、笑いながら言った。「これから行く堀内（ほりうち）は、土塀も石垣も整いすぎるぐらい綺麗に整っています」

「そう」

美緒は、壮に並んで再び歩き出した。

「それにしても、町中に歴史が残っているっていう感じね」

まだ萩に着いて一時間ちょっとしか経っていなかったが、これは美緒の実感である。

歩いていると、いたるところに、江戸や明治が時の流れを止めていた。それは、ガイドブックに載っている観光名所や史跡が多いというだけではない。町全体が巨大な博物館といった趣なのだ。

壮は、アーケードの付いた商店街もあると言うが、美緒たちのこれまで歩いてきたところは人も少なかった。碁盤目状の狭い通りが、静かに低い家並を縫っていた。そして、平日だからだろうか、出会うのは、自転車に乗って見学しているらしい修学旅行の高校生のグループばかりであった。

山口県萩市――。

毛利氏三十七万石の旧城下町だ。

現在は、山と海に挟まれた人口約五万二千人の山陰の小さな市である。

長門峡から流れ下ってきた阿武川は、日本海へ注ぐ直前で東の松本川、西の橋本川と岐れ、三角洲を作る。

萩の市街地は、ちょうどその三角洲の上に載っていた。

というのも、江戸時代の初頭、毛利輝元が三角洲の西北端にある指月山に城を築き、城の東側一帯を城下町として整えたからだという。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor